

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320051

研究課題名(和文) 近代東アジアにおける漢文体とキリスト教——『天路歷程』を中心に

研究課題名(英文) Christianity and classical Chinese style in the modern East Asia: mainly on translations of *Pilgrim's Progress*

研究代表者

齋藤 希史 (SAITO Mareshi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80235077

研究成果の概要(和文)：

『天路歷程』の漢文訳について、Burns 訳の伝播と変容を詳細に検討し、近代東アジアにおけるその影響力の強さを明らかにした。また、もう一つの文言訳『勝旅景程』等、Burns 訳の系譜とは異なる翻訳について、これまでなされていなかった書誌調査を進めた。これらの作業によって、近代東アジアにおけるキリスト教の宣教において漢文体が東アジアの諸言語へ放射状に展開する媒介言語となったこと、それによって漢文体自体の変容が起きたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：

On classical Chinese translation of *Pilgrim's Progress*, I examined the spread and transformation of Burns' translation in detail and clarified strength of its influence comparable to the Bible in the modern East Asia. In addition, through the bibliography investigation on translations different from the genealogy of the Burns' translation, I found another classical Chinese translation and placed it in the history of translation of *Pilgrim's Progress* in the East Asia. It became clear that classical Chinese as medium language presented radially to the many languages of the modern East Asia by the Christian propagation, that the transformation of classical Chinese in itself got up thereby.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総計	6,800,000	2,040,000	8,840,000

研究分野：中国古典文学・東アジア言語論

科研費の分科・細目：人文学 各国文学・文学論

キーワード：『天路歷程』, 漢文体, キリスト教, 近代東アジア

1. 研究開始当初の背景

本研究の全体構想は、近代東アジアにおいて、中国古典文(漢文)がいかなる機能を果たしたか、その伝統と変容のメカニズムを探ろうとするものである。そのさい、出発点として考察すべきは、宣教師による漢文である。宣教師による漢文は、中国のみならず、日本

や朝鮮においても、伝統文体が近代文体に変容する過程で、大きな役割を果たした。単に翻訳語彙のレベルにとどまらず、一定の古典世界を基盤として成立していた漢文が、異なる世界の思想や事象をも表現しうる器として、立ち現れたのであった。それは、キリスト教という強大な力をもつ宗教システムに

よって発動された事件であったとすら言える。

日本における西洋語彙の翻訳が漢語であること背景としては、しばしばその「造語力」が取り上げられるが、一方で、前近代から近代にかけて登場した宣教師による漢文によって、漢文が西洋の事象や思想を表現する文体であるとの認識の転換が起こり、やがて、漢文体の限界が意識されるようになったことは、あまり強調されない。注目すべきは、四書五経を文章のベースにおく漢文体が、キリスト教を語ることによって、漢文体の通用性と固有性をあらわにしたことではないだろうか。本研究は、申請者が従来より積み重ねてきた伝統文体から近代文体への変容の研究をさらに前進させるものとして、こうした観点から、宣教師による漢文に着目するものである。しかし、宣教師の漢文と言っても範囲は広く、質もさまざまである。書誌調査も必要である。

東アジアにおける漢訳『聖書』の研究については、一定の蓄積がある。そこで、それらを参照しつつ、『聖書』と同様、布教のためのテキストとして広範に流布した『天路歷程』の漢訳を最初に取り上げ、書誌学的な基礎研究を行いつつ、近代東アジアにおける文体の変容の意義について、その一端を明らかにする。

1678年に出版されたJohn Bunyanの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress, from this world to that which is to come: delivered under the similitude of a dream)は、キリスト教徒の信仰の歩みを夢物語の形式で語った寓意小説であり、『聖書』とともにキリスト教の布教のために世界各国で翻訳された。

中国における最初の翻訳は1851年、William Muirhead(慕維廉, London Missionary Society)による『行客經歷傳』であるが、これは学童向けのダイジェスト本であり、版を重ねることもなかった。ほぼ同時に翻訳され、1853年に廈門で出版されたのが、William C. Burns(賓惠廉, 1815-1868, English Presbyterian Church)による『天路歷程』である。この翻訳はMuirheadのものとは異なって第1部の全訳であり、今日でもThe Pilgrim's Progressの中国語訳および日本語訳の題名を『天路歷程』としているように、版を重ねて広く流通した。Alexander Wylie, *Memorials of Protestant missionaries to the Chinese*, American Presbyterian Mission Press, Shanghai, 1867は、その書誌についての最も早い網羅的な記載であるが、そこに挙げられたすべての版を確認するのは容易なことではないため、現在の研究でもこの記述がそのまま用いられることが多い。けれどもその記述には、

例えば“reprint”の語が何度も出てくるのだが、版面を変えずに重印したものなのか、活字を組み替えて新たに版を起こしたものなのか、区別されていないなど、不十分なところが少なくない。

また、佐伯好郎『清朝基督教の研究』第九章第二節『天路歷程』の漢譯」は、Wylie以降の出版情報も加えて、「咸豐六年(西紀一八五六年)には香港で繪畫入の再版が出來、更に同治八年(西紀一八六九年)には上海で出版され、同治十年(西紀一八七一年)に二冊ものとなって廣東から出版され、光緒二十三年(西紀一八九七年)には廈門方言譯でも出版された」などと述べるが、いささか簡略に過ぎる記述と言えよう。そのために楊筱「漢譯《天路歷程》版本小史初稿」(《精華漢學研究》第二輯, 北京, 1997)はこれを誤解して、「1869年上海再版1856年香港本。1871年廣東又重印一次。」(p76)と述べるが、じつは、1869年上海本は1856年香港本の再版ではなく、1865年上海版の改版であると考えられる。

このように『天路歷程』の初期漢訳については、現在でもWylieや佐伯の記述に依拠するのみで、出版された諸本に即しての検討がなされておらず、書誌情報に混乱が生じているばかりか、訳文の詳細な検討もいまだ為されていないのが実情である。また、各地の機関に所蔵され、広く普及したと思われるGeorge Piercyの広東語訳は、Burns訳との関連において興味深い翻訳なのだが、野間晃「東北大学附属図書館蔵『漢語方言訳聖書・キリスト教関係書目録』」に簡単に紹介されているのみで、『天路歷程』翻訳史上の位置づけが為されたことはない。本研究は、これらの欠を補うために、まず、『天路歷程』の翻訳について、Burns訳の伝播と変容の把握から着手することとする。

2. 研究の目的

本研究は、近代東アジアにおいて中国古典文(漢文)がいかなる機能を果たしたか、その伝統と変容のメカニズムを探るという申請者の全体的な研究構想のもとに、「東/西」「古/今」が最も先鋭的に交差するキリスト教系テキストにおいて、中国古典文(漢文)がいかなる機能を果たしたか明らかにすることを目的とする。

『天路歷程』には、文言訳をベースに成立した、官話訳・広東語訳・日本語訳がある。文言訳の書誌を確定した後、それぞれについて、文言訳との比較検討、さらに相互の比較検討を行い、古典文と近代口語文とが近代東アジアにおいていかなる位相を形成しているかを、明らかにする。じつのところ、『聖書』を除けば、単一の書物が文言訳を軸にこのような展開を見せているテキストは、他に

見いだしがたい。また、『聖書』に比して、『天路歷程』はより「読み物」としての色彩が強く、登場人物の会話も生き生きとしたものになっており、それがどのように翻訳されているのかを探ることで、官話訳・広東語訳・日本語訳相互の差異のみならず、それらが共通の属性として有している部分を浮かび上がり、延いては、近代口語文形成のメカニズムを解明する手がかりが得られよう。

『天路歷程』の研究を基礎において、さらに明治初期の漢文脈とキリスト教とのかかわりについて踏み込むことも、本研究の目的である。たとえば、キリスト教雑誌である『七一雑報』は『天路歷程』の翻訳を連載したことで知られるが、他の記事については、内容面も文体面も精査が行われていない。また、『天路歷程』の日本語初訳には昌平黌の儒官であった中村敬宇もかかわり、訳本には敬宇の漢詩が掲げられているが、敬宇とキリスト教の関りについては、『西国立志編』などにおける思想面への着目はあるものの、漢文という文体面からの調査は十分に行われていない。『天路歷程』というテキストを出発点に据えることで、実証的かつ展開的に、東アジアにおける漢文脈とキリスト教の問題を考察することができよう。

3. 研究の方法

研究は、①資料の収集と②資料の分析の二つの軸で行われる。20年度および21年度は、収集に重点を置き、21年度および22年度は分析に重点をおく。収集には海外調査も含まれ、分析の成果は校注と論文によって明らかにされる。

初年度は、『天路歷程』の諸本収集およびその電子化を作業の中心とする。収集については、①原本の購入、②マイクロフィルムの取り寄せ、③デジタルカメラによる撮影の三種が考えられるが、それぞれ経費を用意して、その都度適切な方法に依って進めたい。電子化については、原本は本文画像を高精細スキャナで、マイクロフィルムはマイクロスキャナでスキャンし、デジタルカメラによる撮影画像は適宜整理の上、大容量サーバーに蓄積して画像データの公開に備える。というのも、漢訳『天路歷程』は、その内容や文体のみならず、書物というモノとしても、たいへん重要なものである。日本にもたらされた訳本が美華書館の発行であることが顕著に示すように、それは近代東アジアにおける活字印刷の開始と手を携えており、また、活字の用意できない広東語版などは木版で印刷されるなど、当時の印刷術の状況を知ることによってつけと見えよう。また、挿絵の模写や改変の問題を考える上でも、精細な画像を収集・保存する価値は大きい。

なお、原本の整理・スキャン等には謝

金によるアルバイトの補助を積極的に活用する。蓄積されたデータは、データベースソフトのファイルメーカーProに蓄積し、随時点検と整理を加え、次の調査のベースとする。公開可能なものについてはできるかぎり早期に公開することとし、そのために大容量のハードディスクを備えたサーバーを設置し、入力と公開の双方にアドバンテージのあるデータベースサーバーソフトを用いる。

国内の所蔵先は、東北大・関西大などを始め、各地に散在しており、現物を確認した上で、上に述べた撮影等の手段によって資料収集を行う。また、海外の所蔵先は、現在判明しているだけでも、北京、上海、香港、台北の各大学および図書館、さらに大英博物館およびオクスフォード大図書館、ハーバードイェンチン図書館等であるが、事前の調査を綿密に行って優先度を確定してから、実際に渡航して現物を確認し、撮影等の手段によって資料収集を行う。現地におもむく余裕のない機関に所蔵されるものについては、マイクロフィルムによる撮影を依頼するなどして、欠を補う。なお、これらの調査には、それまでに収集したデータを内蔵させたノート型パソコンを携行して対照し、収集に漏れや無駄が生じないように、留意する。初年度後半以降、資料収集が一定の成果を見たところで、「研究目的」に述べたような観点から『天路歷程』の本文翻訳について精密な分析を行い、宣教師の漢文の特質を解明すると同時に、官話訳・広東語訳・日本語訳との比較を行ない、近代東アジアにおける漢文の機能について考察する。

次年度以降は、初年度では収集しきれなかった原本をさらに収集することに加えて、近代東アジアにおける宣教師関係の原本資料（翻訳・伝記等）、新聞雑誌資料についても、積極的に調査収集することとする。『七一雑報』など、すでに影印本ないしマイクロフィルムが出版されているものについては、それを購入して活用する。こうした収集によって、翻訳にさいしての宣教師たちの意識やメディアにおけるキリスト教系テキストの位置を解明することが可能になり、漢文体によるキリスト教系テキストの意義も明らかになる。また、21年度には、『天路歷程』初期漢訳の研究を踏まえて、それを底本とした日本語初訳の本文校訂と注釈に着手し、最終年度までに公刊できるよう、作業を進める。これらの成果を踏まえて、漢訳とその派生テキストが近代東アジアにおいて担った意義について、論文を作成する。

『天路歷程』そのものの分析から、その他の漢文体キリスト教テキストの分析へと比重を移すことも計画される。キリスト教系テキストに用いられる漢語語彙や翻訳における東西の文化的差異については、関西大学の内

田慶市氏や沈国威氏ら、語学研究者によるすぐれた先行研究があるが、漢文体という観点から、明治日本の漢詩漢文や中村敬宇や北村透谷の文章まで含めて、そのキリスト教的文脈と漢学的文脈との融合と相克に着目した研究は、見られない。『天路歷程』の基礎研究で得られた知見をもとに、また、これら先行研究を活用しつつ、この方面における解明に力を注ぐことが、最終的な課題となる。

4. 研究成果

2008年度は、『天路歷程』諸本の調査のために、国内では東北大学、国外では、ハーバード大学イェンチン研究所を中心に実地調査を行い、あわせてオクスフォード大学ボドリアンライブラリのマイクロフィルムを取り寄せて諸本を検討した。その結果、バーンズによる文言訳および官話訳、官話訳の重訳である広東語訳、さらに文言訳からの重訳である日本語訳の諸本については、詳細な書誌を作成するだけの材料がそろえられ、文言訳および官話訳については、電子画像化を終え、電子テキスト化にとりかかったところである。

また、新しい知見として、「漢字圏」と「漢文体」のかかわりについて、雑誌論文や学会発表を行い、中国・台湾・韓国・アメリカの研究者と広く意見交換を行うことができた。とりわけ、漢字圏の展開の三つの層の提唱、すなわち、中国文化の基盤としての原初的な漢字圏、近世東アジア世界の基盤としての拡大された漢字圏、近代以降の海域東アジアを中心に再編された近代漢字圏という構想を提唱したことは、大きな意義があったと思われる。

近代東アジアにおけるキリスト教の拠点とは、言うまでもなく開港地を中心に広がったものだが、近代漢字圏を支えた新しい語彙と文体とメディアの生成にあたっては、香港・上海・長崎・横浜を結ぶ海域東アジアが大きな意味をもったことは、本研究が最終的に明らかにしたいと考えている近代東アジアの漢文体とキリスト教の関係を考える上でも重要な示唆を与えてくれるだろう。

なお、研究協力者の調査によって、米国聖書協会所蔵の宣教師書簡から、これまで知られなかった清国・日本・朝鮮における宣教師の活動の一端が明らかとなった。その研究成果は別途公開される予定となっている。

2009年度は、バーンズ訳『天路歷程』について、これまでの研究を整理した知見をもとに「Burns 訳『天路歷程』の伝播と変容」(『超域文化科学紀要』第14号)を発表し、東アジア世界におけるキリスト教の布教において漢文体が果たした役割について、その一端を明らかにした。整理執筆の過程で生じた書誌学上の疑問を解決するために、オクスフォー

ド大学ボドリアン図書館への現地調査を行い、所蔵本のうちに、アモイで出版されたバーンズ訳の初版が含まれていることを確認し、オーストラリア国立図書館所蔵本との比較を行うことができた。また、その調査においてバーンズ訳とは異なる文言訳も見出し、上海語訳についても全文を確認することができた。これらの成果については、最終年度中に何らかの媒体において報告する予定である。

また、東アジアにおける漢文体について引き続き全般的な調査と研究を行い、とくに明治期の中国紀行文や米欧紀行文、また福澤諭吉の文章などについて、具体的な分析によって得られた成果を図書や雑誌などの媒体で公刊し、それらの成果にもとづく知見を共有するために、複数の学会発表も行った。福澤諭吉による文体革新を近代訓読体の成立と対比しつつ分析したことは、近代における漢文体の位置を測る上で有効な手法であった。

なお、文言訳からの重訳である佐藤喜峰訳『意識天路歷程』については、基礎的なデータを整備し、文言訳との比較を中心とする注釈作業を開始した。

2010年度は、前年度までに収集したオクスフォード大学ボドリアン図書館所蔵バーンズ訳『天路歷程』初版、新発見の文言訳である『勝旅景程』、さらに上海語訳について分析を進め、キリスト教が近代漢文体に与えた作用について、一定の知見を得た。

また、東アジアにおける漢文体に関する全般的な研究として、前年度に継続して福澤諭吉の文章観について考察し、また、夏目漱石の小説のうち、もっとも漢文脈的なテキストとして知られる「虞美人草」について、その意義の再評価を行った。また、同様に古典テキストとの連関の深い志賀重昂『日本風景論』の文体についての考察を発表した。いずれも、近代日本における漢文体の位置を測る上で有効な作業であった。

さらに、本研究の中心的テキストの一つである佐藤喜峰訳『意識天路歷程』について、基礎的なデータ(語彙・文体)の整理および文言訳との対照を行い、それにもとづいた注釈作業を前年度に引き続いて進めた。その成果は2012年3月までに公刊される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

齋藤希史, 文体と思考の自由——福澤諭吉の射程, 福澤諭吉年鑑, 社団法人福澤諭吉協会, 37, 2010.12.30, pp.75-92

齋藤希史, <同文>のポリティクス, 文学, 第

10 卷 6 号, 岩波書店, 2009.11・12, pp. 38-48
齋藤希史, Burns 訳『天路歷程』の伝播と変容,
超域文化科学紀要, 第 14 号, 2009.11,
pp. 123-140

齋藤希史, 漢文脈の中の『米欧回覧実記』, 米
欧回覧の会編『世界の中の日本の役割を考
える : 岩倉使節団を出発点として』, 慶應
義塾大学出版会, 2009. 4

齋藤希史, 思惟する主体—湯川秀樹と漢文脈,
大航海, 第 67 号, 2008. 7. 5, pp. 66-72

齋藤希史, 漢字圏としての東アジア, 大航海,
第 66 号, 2008. 4. 5, pp. 77-85

〔学会発表〕(計 4 件)

齋藤希史, 近代訓読体と東アジア, ICIS 第 4 回
研究集会・CSAC 第 14 回研究集会「近代東ア
ジアにおける文体の変遷—形式と内実の相
克を超えて—」 2009. 12. 20

齋藤希史, 漢字圏としての東アジア, 国際シ
ンポジウム「東アジアの地域交流」台湾中央
研究院 近代史研究所 檔案館 2009. 12. 18

齋藤希史, 帝國與漢詩文, 區域文化形構與知
識生産 國際學術工作坊, 臺灣成功大學臺灣
文學研究所 2008. 11. 14-15

齋藤希史, 漢字圏植民地と近代日本文語文,
比較植民主義與文化 國際學術工作坊
International Workshop on Comparative
Colonialism and Culture 台湾中央研究院
2008. 9. 5

〔図書〕(計 4 件)

齋藤希史, 読誦のことば—雅言としての訓
読, 続「訓読」論, 中村春作・市來津由彦・
田尻祐一郎・前田勉編著, 勉誠出版,
2010. 11. 15, pp. 15-46, 480p.

齋藤希史, 漢文スタイル, 羽鳥書店,
2010. 4. 7, 291p. +5P.

齋藤希史, 近代訓読体と東アジア, 近代東ア
ジアにおける文体の変遷, 沈国威・内田慶市
編著, 白帝社, 2010. 3. 31, pp. 109-119

齋藤希史, 『訪事日録』注釈, 解説 天然自由
の文体, 新古典文学大系明治編 5 海外見聞
集, 岩波書店, 2009. 3

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

<http://friday.c.u-tokyo.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 希史 (SAITO Mareshi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 80235077

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :